

日本ロレンス協会第45回大会プログラム

日時：2014年6月7日（土）、8日（日）

会場：相模女子大学 11号館2階1127教室（または1115教室）

住所：〒252-0383 神奈川県相模原市南区文京 2-1-1

連絡先：相模女子大学学芸学部英語文化コミュニケーション学科

中林研究室 tel: 042-742-1685 e-mail: m-nakabayashi@star.sagami-wu.ac.jp

交通アクセス：小田急電鉄新宿駅より小田急小田原線「相模大野駅」下車、徒歩約10分

昼食のご案内：7日、8日両日とも学生食堂は営業していません。大学から徒歩圏内の「相模大野駅」周辺には食事処が数多くございますので、そちらのご利用をお願いいたします。尚、飲み物の自動販売機はキャンパス内に多く設置されておりますのでご利用ください。

宿泊のご案内：今大会のご宿泊に関しましては、小田急小田原線「相模大野駅」のステーションビル内「小田急ホテルセンチュリー相模大野」をご利用いただきたく、ご案内申し上げます。大学周辺に他の宿泊施設がなく、このホテルのご利用が最も便利です。ご予約の際には各自でご予約をされるのではなく、中林正身開催校委員に取りまとめていただきますので、5月10日までに「禁煙部屋」か「喫煙部屋」のいずれをご希望されるかをご明記の上、メールで中林委員まで（e-mail: m-nakabayashi@star.sagami-wu.ac.jp）ご連絡くださいますようお願い申し上げます。部屋はすべてシングルルームで、料金は1泊8,600円（朝食をつけますと9,700円）となります。

役員会

日時：6月7日（土） 11:00～12:30

場所：相模女子大学11号館2階1122教室

昼食を用意します。代金は当日お支払いください。お弁当代は一律1,000円です。

第1日目：6月7日（土曜日）

受付：13時より

総合司会：中林 正身（相模女子大学准教授）

◎開会の辞：会長 新井 英永（熊本大学教授）（13:30）

◎開催校挨拶：相模女子大学学芸学部長 田畑 雅英（相模女子大学教授）（13:35）

研究発表

司会 木下 誠(成城大学准教授)

◎1. 13:40-14:15

外層の知覚を超えて——D.H.ロレンスとウォルター・ペイター

弘保 悠湖 (青山学院大学大学院修士課程)

◎2. 14:15-14:50

『逃げた雄鶏 (死んだ男)』の二つの自然とその推移
——雄鶏 (動物的自然) から蓮・薔薇 (植物的自然・宇宙) へ

稲見 博明 (女子美術大学教授)

*休憩 14:50-15:00

シンポジウム 1

◎ロレンスと共同体 15:00-17:30

司会・講師 石原 浩澄(立命館大学教授)

炭鉱共同体と「ストライキの物語」

講師 井上 麻未(聖路加国際大学教授)

ロレンスにおける民主主義批判

講師 水田 博子 (大阪大学大学院)

恩讐の彼方へ——「最後の笑い」における〈共同体〉

講師 福田 圭三(大阪経済大学専任講師)

◎総会 17:40-18:20

◎懇親会 18:30-20:30 ごろ

場所：相模女子大学マーガレットホール 2階 カフェテリア 101

会費：¥5,000 (大会当日受付でお支払いください)

第2日目:6月8日(日曜日)

シンポジウム 2

◎第一次世界大戦の記憶におけるロレンスの位置 9:30-12:00

犠牲者の記憶と加害者の記憶

司会・講師 高橋 章夫(大阪市立大学非常勤講師)

第一次世界大戦の記憶とロレンス

講師 霜鳥 慶邦(大阪大学准教授)

良心的兵役拒否と反戦平和運動の記憶——ガーシントンの人々とロレンスの場合

講師 有為楠 泉 (名古屋工業大学名誉教授)

大戦間期のロレンスの受容とその歴史的コンテクスト

講師 加藤 洋介(西南学院大学教授)

◎閉会の辞:副会長 浅井 雅志 (京都橘大学教授)

研究発表

外層の知覚を超えて——D.H.ロレンスとウォルター・ペイター

弘保 悠湖(青山学院大学大学院修士課程)

ロレンスとダーウィンの関係で論じられるものはあまり多くない。生命の流れを何より大事にするロレンスに対して、ダーウィンの進化論が生物の規定性・法則性を表していたからだろうか。たしかに、視覚優位の文化が繁栄する世紀末とその転換期において、ダーウィンが受容された状況は、触覚優位を提示するロレンスとはまったく相容れないものと考えられる。しかし、ダーウィンのテキスト、とくに *The Structure and Distribution of Coral Reefs* と古今のダーウィン研究、さらに、ロレンスのテキストを照査すると、彼らの類似点、たとえば、博物学に否定の色を示し、地質学的に過去をみる両者の類似性が浮き彫りになるのである。本発表であつかうロレンスの作品は、おもに、イタリアのエッセイ群と中編小説 *Saint Mawr*、詩の“Lucifer”、“Cypresses”である。また、同じくダーウィンの影響がその作品に色濃くでているウォルター・ペイターの *The Renaissance* の「モナ・リザ」の記述からロレンスが影響を受けて、*Twilight in Italy* の「糸紡ぎと修道僧たち」に出てくる糸紡ぎの老女の記述が描かれているということを指摘して、ダーウィンからペイターへ、ペイターからロレンスへと受け継がれた過去の認識の地層性を提示したい。

『逃げた雄鶏(死んだ男)』の二つの自然とその推移 ——雄鶏(動物的自然)から蓮・薔薇(植物的自然・宇宙)へ

稲見 博明(女子美術大学教授)

本発表は、ロレンスの究極的ヴィジョンの体現と考えられる『逃げた雄鶏(死んだ男)』に見られる二つの自然、即ち、第1部の雄鶏に代表される動物的自然と第2部のイシスの女司祭(巫女、少女、女)に表現される蓮やバラの花に代表される植物的自然に注目し、前者から後者への変容にロレンスの文学の自然哲学の究極的意義があることを論ずるものである。

この中編小説において、ロレンスはキリスト教と異教(自然宗教)の融合の文学的表現をしたことは見やすいことである。しかし、それは、ヨーロッパの他の作家たちが試みたことであるし、また、ケルト文化圏におけるキリスト教はそういうものであるから、それ自体はロレンスの独自のなことではない。

自然は、少なくとも、鉱物的自然、植物的自然、動物的自然、宇宙的自然の4つに分けられる。ロレンスの場合、自然は宇宙と連繫しているので、4つ目の自然を抜いて、3つの自然を考えると、本作品では、とりわけ、動物的自然と植物的自然のコントラストが鮮烈であり、前者から後者へ変容が表現されていると見られるので、ロレンスの究極的ヴィジョンは前者をいわば昇華し包摂した植物的自然(=宇宙)のコスモスに存すると考えられる。

また、これを敷衍するならば、陰陽の氣の世界と通じる世界観ではないかと思われる。「死んだ男」を陽、イシスの女司祭を陰とするならば、本作品は、陰陽調和の世界=宇宙を表現していると見られよう。

以上のことを本発表で述べたい。

シンポジウム 1

ロレンスと共同体

司会・講師 石原 浩澄 (立命館大学教授)

個として成就することの大切さや他者性の尊重を説いたロレンスを、個人主義にのみ還元してしまうのは単純であろう。個人としての存在のあり方を考える一方で、他者とのかかわりをどのように考えていけばよいか。プライベートの問題とパブリックな問題をどのように折り合いをつけ、関係を構築・維持するのか。ロレンスのみならず、今日のわれわれに向けられた問いでもあろう。こうした問題を、ロレンスおよびロレンスの周辺に関する、共同体という視点から論じることはできないか、という発想から共同討議の場を企画した。問題意識を共有しながら、報告者はそれぞれ独自の観点から、ロレンスの描く社会や共同体、あるいはロレンス自身の経験等も視野に入れながら、それぞれの問題関心を提起し、検討を行なうことになるであろう。

私自身の報告としては、「ロレンスの共同体」という点からは少々離れることになるが、ロレンス批評の確立に多大な影響を及ぼした F. R. リーヴィスの批評行為を共同体という視点から考えてみたい。批評活動を批評家各自の個人的営為としてではなく、協同作業ととらえたリーヴィスに注目する。リーヴィスの描いた批評の共同体という考えの背景や特徴を探ることは、彼の言論活動そのものに対する考え方や意識を考える作業になるであろうが、リーヴィスの考え方や企図の限界や可能性なども考えてみたい。

炭鉱共同体と「ストライキの物語」

講師 井上 麻未 (聖路加国際大学教授)

D.H.ロレンスのテキストには、モダニズム作家の多くが語ることがなかった 19 世紀後半から 20 世紀初頭の炭鉱労働争議や 1926 年のゼネラル・ストライキが書き込まれている。初期の一連の短編 'strike tales' は、ロレンスが 1912 年の全国炭鉱ストライキの渦中にある炭鉱町で執筆した作品であり、労働者やその妻の視点を通して、炭鉱労働者の生活や連帯、夫婦間の緊張や争いを細やかに伝える写実性の高い小説である。

英国の基幹産業であった炭鉱業は、19 世紀末から第一次世界大戦にかけてめざましい発展を遂げた。しかし、実際には炭鉱業は多くの構造的矛盾を内包し、その矛盾は帝国主義の衰退と共に顕在化し、激しい階級対立を引き起こした。1911 年には炭鉱労働者は 100 万人を超え、1914 年までに MFGB (Miners' Federation of Great Britain) は世界最大の労働組合に成長を遂げていた。英国炭鉱労働争議の歴史研究は、産業の衰退と共に一旦は縮小への道を歩むが、1980 年代後半よりクラス・ジェンダーの視点を入れた研究へと発展し、炭鉱労働争議の見直しの機運が高まった。本発表では、ストライキをテーマとし、炭鉱共同体を舞台に描かれたロレンスの初期の 4 つの短編、'A Sick Collier' (1912)、'The Miner at Home' (1912)、'Her Turn' (1913)、'Strike-Pay' (1913) を取り上げ、近年の炭鉱労働争議の歴史研究の成果を踏まえ、クラス・ジェンダーの観点からこれらの作品を再読する。

ロレンスにおける民主主義批判

講師 水田 博子 (大阪大学大学院)

本発表では、ロレンスのエッセイ、指導者小説をもとに、彼が考える個と集団の関係、指導者の問題を、「民主主義批判」という観点から検討する。ロレンスは個について「ただそこにある、とりかえのきかぬもの」と位置付けているが、他方でそうした個は他者との関係性の中で作られるものでもある。個が完全に開花する空間と、不可解で受け入れることのできない他者との共生の空間とは両立するのか。こうした個と集団性を両立させる問題に対して、ロレンス自身が具体的な解決策を示しているわけではない。また、その指導者像は自身が反対していた全体主義に陥る危険性をもったものでもある。しかし彼の両義性をもった発言、相矛盾するコメントは、「情勢の下で考える」という視点に立てば、実践的な政治的態度であるとみなすこともできる。

個がその単独性を失うことなく、他と共同することのできる空間づくり、全体主義とも、民主主義とも異なる、新たな民主主義の創設は、現代のわれわれにとっても重要な課題である。ロレンスの民主主義批判を、一種のエリート主義（貴族主義）やユートピア思想として退けず、また単なる神秘主義にも還元せず、リアル・ポリティクスの中で検討されるべき実践的な提案として検証する。

恩讐の彼方へ——「最後の笑い」における〈共同体〉

講師 福田 圭三 (大阪経済大学専任講師)

1923年、イギリスに一時帰国したロレンスは、友人たちを招いて、ニューメキシコへの同行を募るが、実際に帯同したのは Dorothy Brett 一人であり、John Middleton Murry は参加の約束をしながらも、それを果たすことはなかった。「最後の笑い」が書かれたのは、これからほどなくのことであり、そこには Brett と Murry を想起させる二人の人物が登場する。しかし、その取扱いは、まるで両者の〈共同体〉への参加の姿勢に報いるかのように著しい対照をなす。つまり、前者が奇跡的に聴覚を取り戻すのに対して、後者はあっけなくその命を落としてしまう。後年 Murry は、ロレンスがパン神を使って自分を殺したと述べたとされるが、従来この小説は〈パン神の物語〉として読まれてきた。したがって人物たちの奇跡的な回復やその死についても、パン神による賞罰と見なされている。このように、パン神を中心に作品を読むことは、それ自体無理があるようには見えないけれども、〈共同体〉の角度から見ると、少なくとも問題と思われるのは、〈パン神の物語〉の前提とする〈共同体〉が、過去に失われた〈共同体〉、すなわち現代世界を批判するために、いわば原理として呼び出されたものにすぎないという点である。これは明らかに近代的な〈社会〉との対比によって概念化された〈共同体〉であり、「最後の笑い」において探求される〈共同体〉とは必ずしも一致しないように思われる。本発表では、〈共同体〉に焦点を当てながら、ロレンスが友人たちとの離合集散のうちに見出した〈共同体〉の一端が、この小説においてどのような形であらわれているかを考察したい。

シンポジウム 2

第一次世界大戦の記憶におけるロレンスの位置

司会 高橋 章夫 (大阪市立大学非常勤講師)

第一次世界大戦が勃発してから 100 年の節目を迎えた今年、ジェイ・ウィンター編 *The Cambridge History of the First World War* や、山室信一 (他) 編『現代の起点 第一次世界大戦』を初めとして、続々とこれまでの研究成果がまとめられている。近年の大戦研究は、「越境」が大きなテーマとなっており、トランスナショナルな視座からの研究が盛んに行われ、さらには歴史学を起点とした学際的な研究も活発である。大戦研究に携わる、歴史学、人類学、心理学、そして文学といった様々な分野を繋ぐ重要なキーワードが「記憶」である。個人的記憶にせよ、集合的記憶にせよ、記憶とは、過去の事実の忠実な再現ではなく、主体が、その信念に基づいて創造し、時とともに変化していく物語である。本シンポジウムでは、移ろい行く大戦の記憶を分析し、その中で、ロレンスはどのような位置を占めるのか、という問いに取り組む。これまでのロレンスと大戦を結びつける議論の多くは、文学研究が中心であった。「大戦の記憶」というより広い文脈にロレンスを置くことによって、ロレンスを、さらには第一次世界大戦を新たな視点から考察する一助になればと考えている。

犠牲者の記憶と加害者の記憶

講師 高橋 章夫 (大阪市立大学非常勤講師)

概して、戦争の記憶は犠牲者の記憶と化す傾向がある。様々な立場から戦争を経験した者は、己が属する集団が払った犠牲を強調することで、その集団独自の「記憶」を作り出し、後世に伝えた。イギリスにおける第一次世界大戦の記憶も例外ではなく、様々な集団が、自らが払った犠牲を語った。その中で、「歩兵隊の下級将校として西部戦線に従軍し、幻滅した詩人」という集団に属するサースンやオーウェンらの作品は、大戦文学のキャノンの地位を獲得した。彼らの払った犠牲は大戦の国家的記憶にまで高められ、コメモレイトされることとなった。だが一部の歴史研究者は、文学作品中心の大戦観を否定しており、そのような修正主義的立場からの歴史研究は増加の一途を辿っている。この動向は、大戦の記憶からの文学の排除を意味しているとも言えよう。このような現状を踏まえ、本発表では、犠牲者の表象といった観点から、大戦文学を他の言説と比較し、大戦の記憶に占める文学の位置の変遷を辿る。さらには従来の歴史学、文学研究の多くが見落しており、それ故に大戦の記憶から抜け落ちている、加害者が語る／語らない大戦の記憶を論じる。

第一次世界大戦の記憶とロレンス

講師 霜鳥 慶邦 (大阪大学准教授)

第一次世界大戦 100 周年の今、この戦争について考えることは、決して現代の世代とは無縁の遠い過去の出来事を振り返る行為ではない。第一次世界大戦は、歴史上の戦争の中の一つというレベルをはるかに超えて、その後の戦争認識に決定的な影響を与え続けている、いわばパラダイムのごとき存在と化していると言っても過言ではないからだ。つまり第一次世界大戦について考えることは、実はきわめて現代的なテーマであるということだ。本発表は、まず、大戦の記憶研究の動向を紹介しながら

ら、なぜ今第一次世界大戦について考える必要があるのか、その今日的意義と重要性についてまとめてみたい。そして現代における戦争の記憶のパラダイムの中で、ロレンス文学がどのような位置にあり、どのような意味をもち得るのか、歴史的背景や作家間の影響関係とは別のかたちで探ってみたい。

良心的兵役拒否と反戦平和運動の記憶——ガーシントンの人々とロレンスの場合

講師 有為楠 泉 (名古屋工業大学名誉教授)

第一次世界大戦中イギリス史上初めて施行された徴兵制は、個人の意思を尊重する伝統と折り合いをつける形で良心的兵役拒否という抜け道を承認せざるを得なかった。では良心的兵役拒否は反戦平和運動とどの程度結びつくのか。1950年代に核兵器廃絶を唱えて始まり、現在まで続くバグウォッシュ会議のような反戦平和活動を考えるとき、その創設期の活動の立役者として浮かぶのはバートランド・ラッセルであり、その姿は、第一次世界大戦中のイギリスで徴兵制に対する抵抗運動を牽引した反徴兵制フェローシップ (NCF) の活動を支えたラッセルを思い起こさせる。第一次世界大戦の記憶は、反戦平和運動の原型の記憶でもある。

大戦中徴兵制に反対し、良心的兵役拒否を実践もしくは支援した人々は労働党やNCFのメンバーだけではなかった。自由党議員フィリップ・モレルとレディ・オットリン夫妻の活動支援はよく知られており、彼らのガーシントン邸にはラッセルの他にも徴兵制反対の先鋒である労働党のスノーデンやマクドナルド、NCFの議長で絶対的兵役拒否者のクリフォード・アレンらが入り出していた。本発表ではガーシントンの人々の活動を再確認すると同時に、それと一線を画し、自分を良心的兵役拒否者ではないとしたロレンスの独自の平和活動について考える。

大戦間期のロレンスの受容とその歴史的コンテクスト

講師 加藤 洋介 (西南学院大学教授)

作家ロレンスに対する1920年代、30年代の評価は、いまでも比較的良好に知られているだろう。主に、T・S・エリオットやJ・M・マリら著名な批評家たちによって論じられたからである。彼ら同時代人のロレンス批評はいまでも十分に読む価値があるが、それらは大戦間期という時代の産物でもあり、時代の歴史的コンテクストを反映する。第一次世界大戦の開戦から戦争を批判しつづけたロレンスは、大戦間期のさまざまな政治的立場で論じられた。ナショナリズム、ファシズム、優生思想、社会主義、民主主義などである。これらの政治学は第一次世界大戦に対する直接の政治的、思想的反応として発展し、イギリス社会に強い影響を及ぼした。それらのダイナミックな関係のなかで、ロレンス批評の歴史ははじまったと言える。

近年の歴史学で、第一次世界大戦にかかわる重要な研究が量産されており、ロレンスの同時代の歴史的コンテクストの理解を刷新している。歴史的コンテクストの理解が変化すれば、ロレンス文学の理解もまた変化する。そこで、本発表では、大戦間期にかんする新しい歴史学の動向を紹介しながらロレンス文学のいくつかの主要な概念——国家、民主主義、文明、生など——をとりあげ、それらを分析し、ロレンス研究の新しい視点の構築を試みる。

